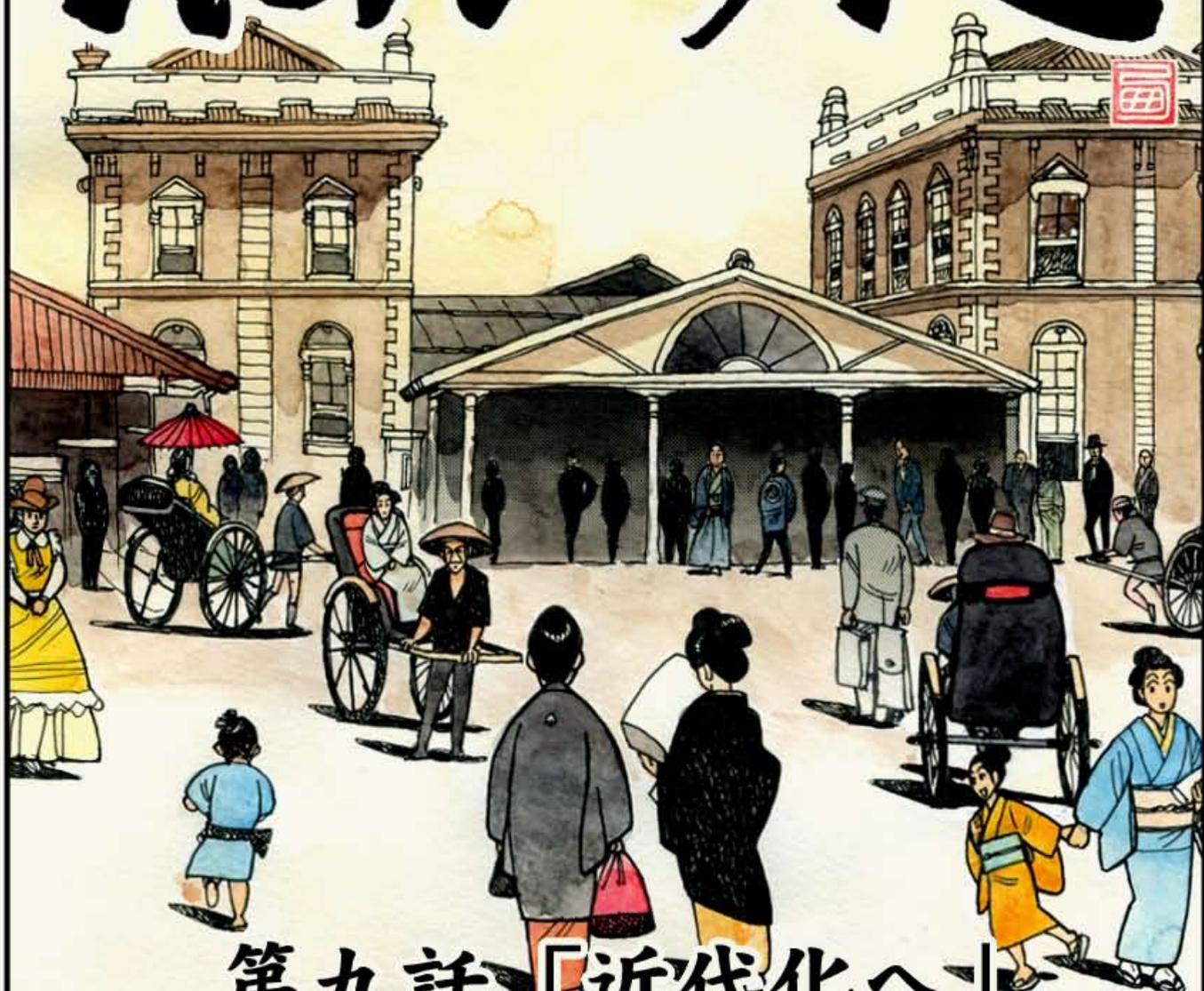


住友四百年

源 泉



第九話「近代化へ」

作:西ゆうじ 画:長尾朋寿



日本が江戸から明治に変わる時、
泉屋住友はまたしても
危機に立たされました。
それは新政府による別子銅山接收…
いわば、権力による乗っ取りでした。

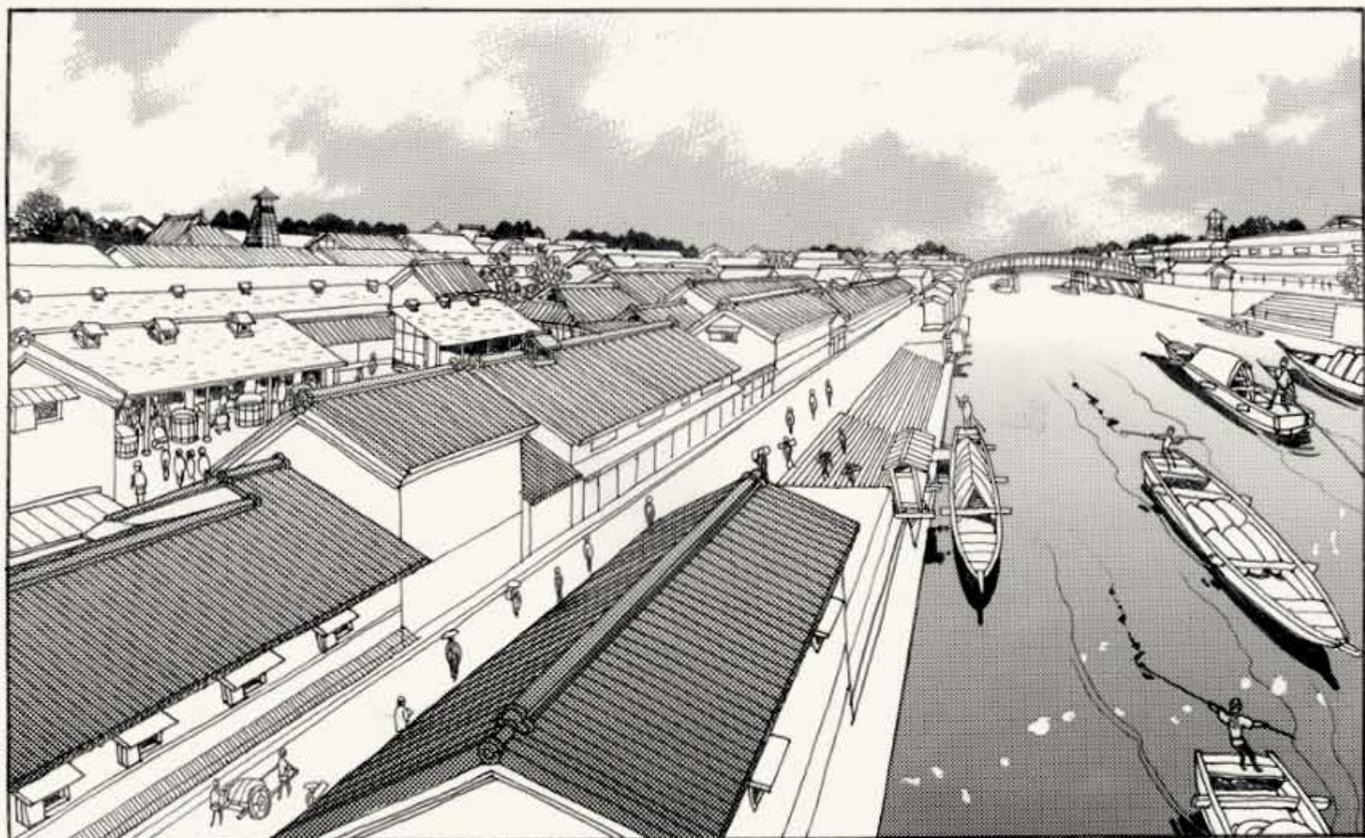
その別子銅山を守るべく、
新政府を恐れることなく
立ち向かったのが、
別子の申し子とも言われ、
その時の、別子銅山支配役の
広瀬義右衛門でした。



お支配役は、新政府の
川田はんという
お役人と、大坂と京へ
向かいのつたけど、この
別子銅山お山を守る事が
できるやろうか？

川田はんは、お支配役の
「お国を思えばこそ、別子
銅山は泉屋に続けさせてほしい」
という出願に心打たれはって、
協力してくれはるそうやさかい、
大丈夫やろ。

そやけど、川田はんは
新政府のお役人いうても、
土佐藩の下っ端らしいで。





京へ行って、
新政府の議定副總裁の
岩倉具視さまに
願ひ出るういうんか、
義右衛門？

へいそうだす、源兵衛はん。
川田はんが、それが
一番いいとおっしゃい、
ご自分は土佐の殿様の
山内容堂さまに働き掛けて
下さるそうどす。

そやけど、そんな
お偉い方に、泉屋の
上から五番目程度の
支配役のお前が、
お会いできるんか？

普通なら無理どす。
けど、わての叔父で
曼殊院親王家に仕える
漢学者の北脇淡水と
広橋大納言家用人の
北脇要人の伝がおます。



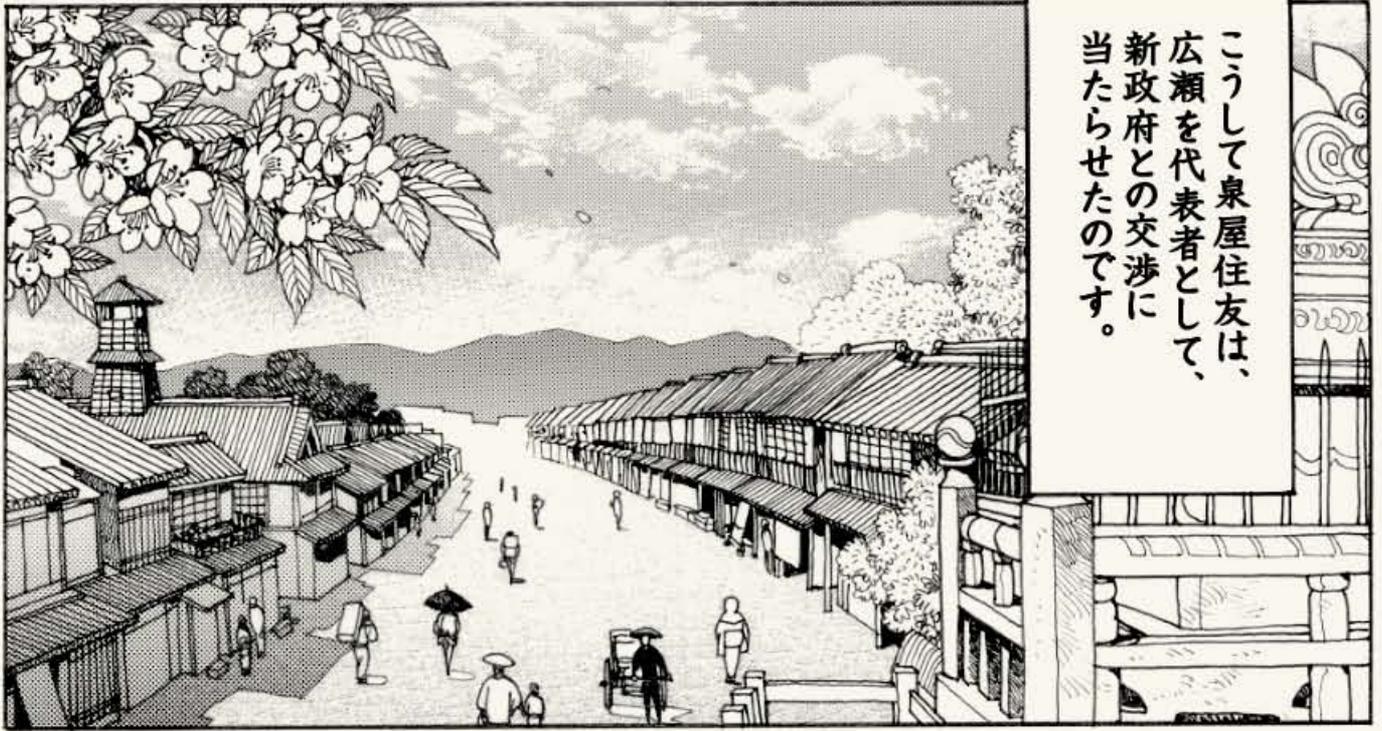
…うん
そうか。

あとは当たって
砕ける…いえ、
当たって
砕いたるとす。銅山の
採掘同様にとす。

やはり別子銅山は、
この泉屋が経営すべきだ。
それが新しい日本の
大きな力になる。



こうして泉屋住友は、
広瀬を代表者として、
新政府との交渉に
当たらせてたのです。



岩倉具視邸



大坂・泉屋でございます。
議定副總裁、岩倉様に
お願いがあり、参りました。
お目通りを願います。

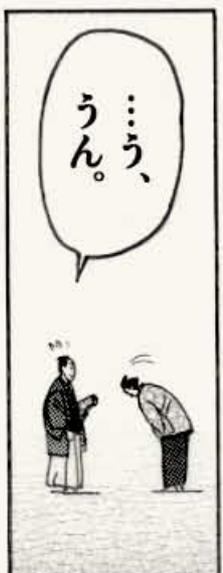
副總裁は、お忙しい。
見ず知らずの者には、
お会いになられない。



これは、紹介状と
ご挨拶の印でおます。
ほな、また寄らせて
もらいます。



……うん、
うん。





本日、副總裁は
お留守である。

新政府成立の時期もあり、
岩倉具視とは、
なかなか会うことが、
叶いませんでした。



また他に優る顯官なき顯官、
新政府の議定副總裁が、
一銅吹き商の第五番目の
支配役に、そう簡単には
会ってくれるものでも
ありません。



ほんまでっか！
おおきに！
おおきに！

泉屋の別子銅山支配役、
義右衛門と言ったな。
副總裁が明日、
お会い下さる。



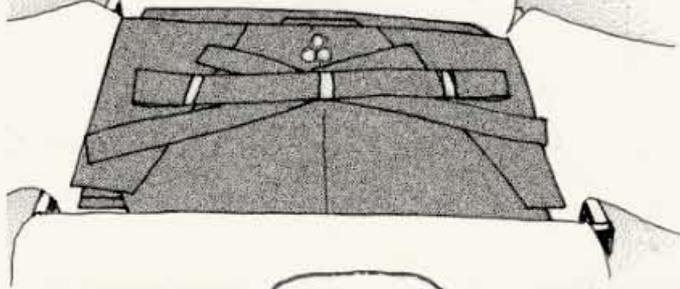
しかし、広瀬は決してあきらめず、
萎えることなく、泉屋のため、
新しい日本のために、何度も何度も
岩倉具視を訪ねたのです。

苦勞が報われたのお。

へい。でも、問題はこれからでおます。



この報はすぐに大坂に知らされ、広瀬を正式な泉屋住友の代表として、岩倉に接見させるために、住友家の定紋入り袴かほしもを送ったのです。



お許し下さいます様、
お願い申し上げます！

土州さまを通じて願書を提出しております通り、別子銅山は泉屋が見つけ、稼業して参りましたものでございます。どうか、新たなお国のためにも、永代請負を、



相わかった。
詳しく取り調べの上、
返答しよう。



その結果、慶応四年（1868年）
三月、新政府より正式に、
泉屋住友の別子銅山永続経営が
許可されたのです。



そんな矢先、大坂
本店の重役達の間から、
想像を絶する提案が
上がったのです。

旦那さん。
別子銅山を余所に
売るといふのは、
ほんまでつか？

：うん。そういう
話があるというのは、
ほんまや。な、
そやろ？

へい。
銅会所の小山はんが、
別子を十萬兩：新政府
貨幣やと十萬円ですが、
それで買いたいという
人がいると勧めて
来はりました。

まさか、その話を
飲むんところが
まっしやろな？

わてら毎日毎日、
金策に歩いてるんや。
それは生産量は上がらず、
人手の賃金や食い扶持だけ
嵩んでいく別子銅山の
せいや。

それが十萬兩で
売れば、
仰山ある借金も
返済できるんどす。

あとは兩替屋の金貸しと
質吹屋での銅の仕事すれば、
そこそこやっつけていけて、
御家は保てるんや。

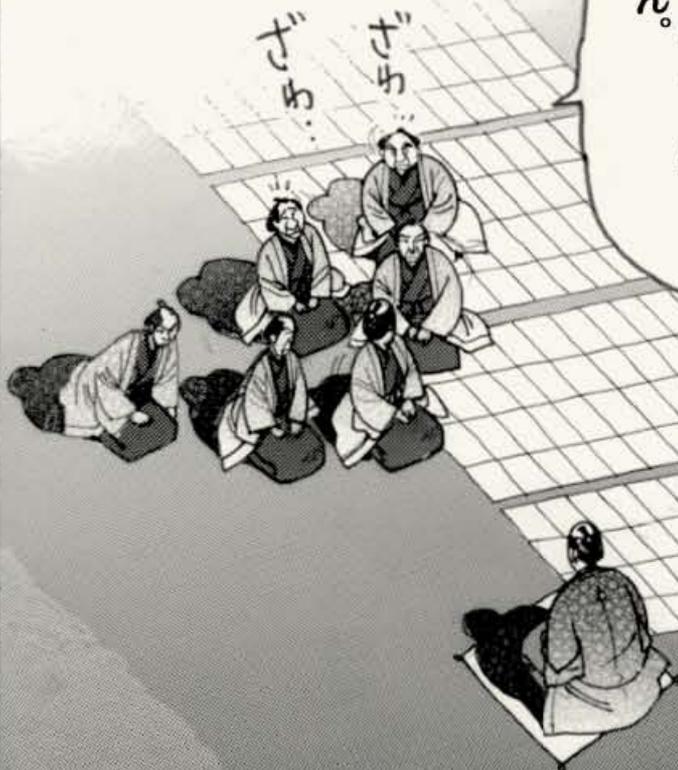
あきまへん。
それはあきまへん。
別子銅山には、
泉屋住友ために、
命をかけて働いてくれてる
五千人の稼ぎ人、
へてから、その家族が、
何万人といてるんどす。

初代文殊院様から始まった
この御家は、銅山で働いて
くれている者の上に立っていて、
旦那さんやご重役たちだけの
もんと違うんどす。



そや、その通りや。
銅山を売るくらいなら、
潰れたほうが、稼ぎ人も、
文殊院様や、御先祖様らも
納得してくれはるかも
しれまへん。

この私^{わて}が、
泉屋住友を
倒産^{つぶ}させません。



その後、何度も激論が
交わされましたが、
広瀬の血涙を絞った
熱い思いが、別子銅山
売却を食い止めさせたのです。

生野鉾山

そんな時、広瀬に追い風が
吹いたのです。それはその年、
年号が明治と改まった九月、
新政府は広瀬の力量に目をつけ、
「鉾山司」という役人に
任命したことでした。

広瀬は泉屋住友の支配役と
鉾山司を兼務することで、
大きな物を得たのです。





そうなんや。
この西洋の黒色火薬や、
技術を導入したら、
別子銅山は甦る…いや、
今まで以上の銅山になる！



広瀬は鉾山司として視察に赴いた
生野銀山、伊豆金山で、
御雇外国人のコワニエと出会い、
その近代採鉾法を学び、
疲弊した別子銅山再生には、
西洋技術が絶対条件だと確信したのです。

なんとしても、なんとしても、
別子銅山を強い山にせんと
あかんのや。泉屋住友と
働く大勢の人間と
その家族のためにも！



不採算となっていた、東京の
中橋両替店、浅草の札差店の
金融部門を閉鎖し、
将来性のある手代を大阪本店へ
連れて帰りました。



支配役、
この重い荷物は
なんでつか?

山銀札や。

この年四月、
広瀬は政府の鉾山司を辞し、
別子銅山の近代化を目指し、
泉屋の債権回収と、
借財返済に奔走すると同時に、
新たな手に打って出たのです。



その頃の泉屋住友の経営は、
兎にも角にも逼迫ひっぴくしていました。
旧大名貸の債権十八万両、
鉾夫達の食用米に買請米のために
政府から借りている八万八千五百両、
その他の借財のためでした。

ほな別子へ
行って参ります。



別子山内限りで
通用する、
泉屋だけの…
六種類の紙幣や。



やまざん
さつ？

それ
なんですか？

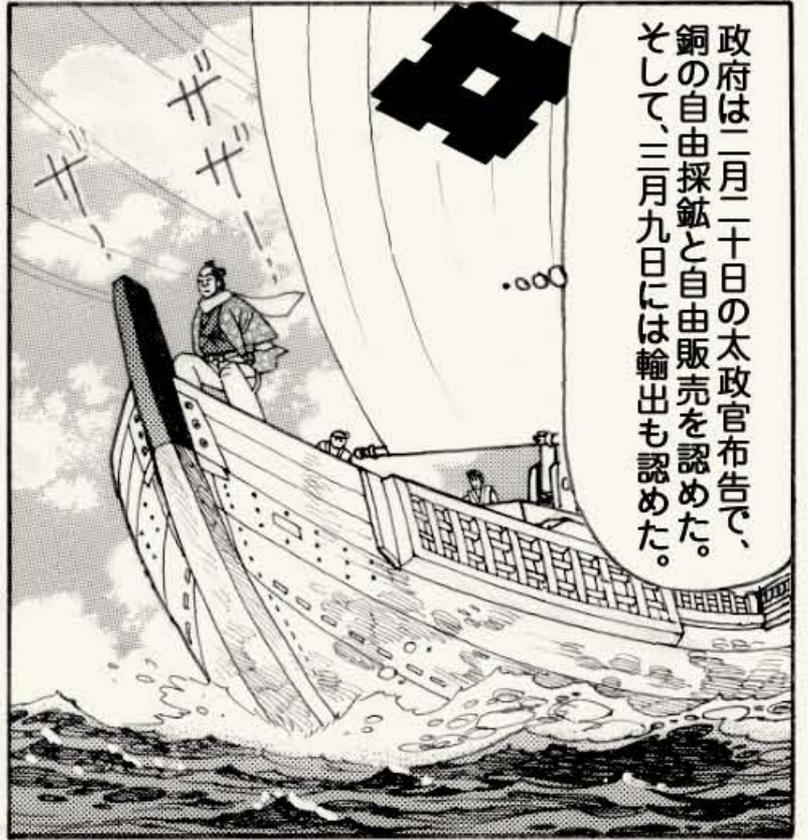


それは明治二年九月、
広瀬が政府の許可を得て、
別子銅山の資金難を
緩和させるために、
この年に改名した
「広瀬幸平」の名義で
発行した私札でした。



そして翌年には、
別子銅山の近代化を
はかるための資金調達として、
大阪為替会社（日本初の銀行）に
出資し、融資を
引き出したのです。

政府は二月二十日の太政官布告で、銅の自由採鉱と自由販売を認めた。そして、三月九日には輸出も認めた。



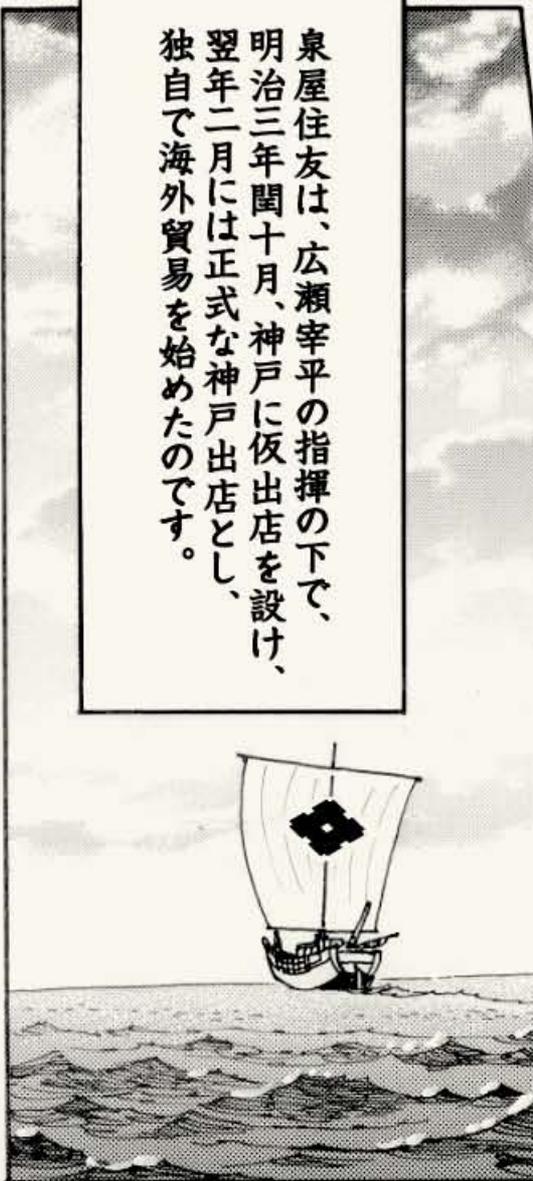
また大阪の本店で精錬せずとも、別子の山元で精錬してもよいともなった。



あの神戸に銅販売の出店を設けて、外国商館に売り込む！

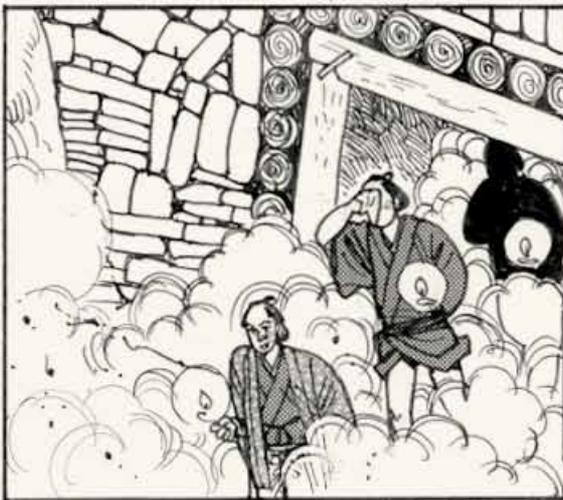


泉屋住友は、広瀬宰平の指揮の下で、明治三年閏十月、神戸に仮出店を設け、翌年二月には正式な神戸出店とし、独自で海外貿易を始めたのです。

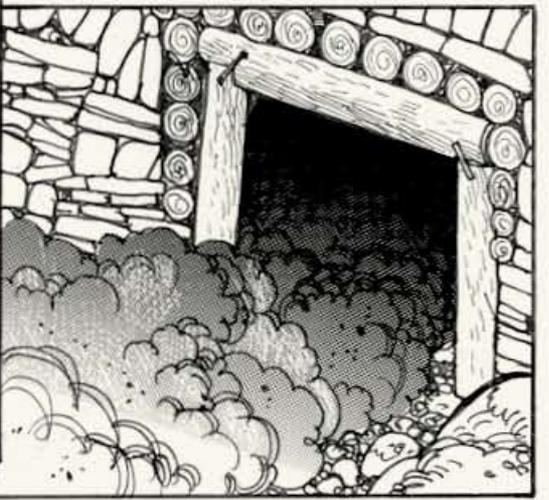




別子に戻った広瀬は、
鉾夫達の食用米を政府に頼らず
下関などからの調達と、
新居浜周辺の田畑の購入で、
自給できる様になると同時に、



鉾山司の時に学んだ、
黒色火薬による
採掘という近代化も
実行しだしたのです。



らや。

へい。これで、
これまで以上の
銅が採れます。



どうや。
黒色火薬の威力は
凄いやろ。

黒色火薬だけが
西洋の近代的
採鉱法やない
もつともつと
あるんや。



けど：
そのもつともつと
ある技術は
どうしたら別子に
導入できますんで？

泉屋住友も、
政府のように
お雇い外国人を
使うんや。

今度、横浜へ行つて、
外国人技師を
雇うてくる。
伝はあるんや。

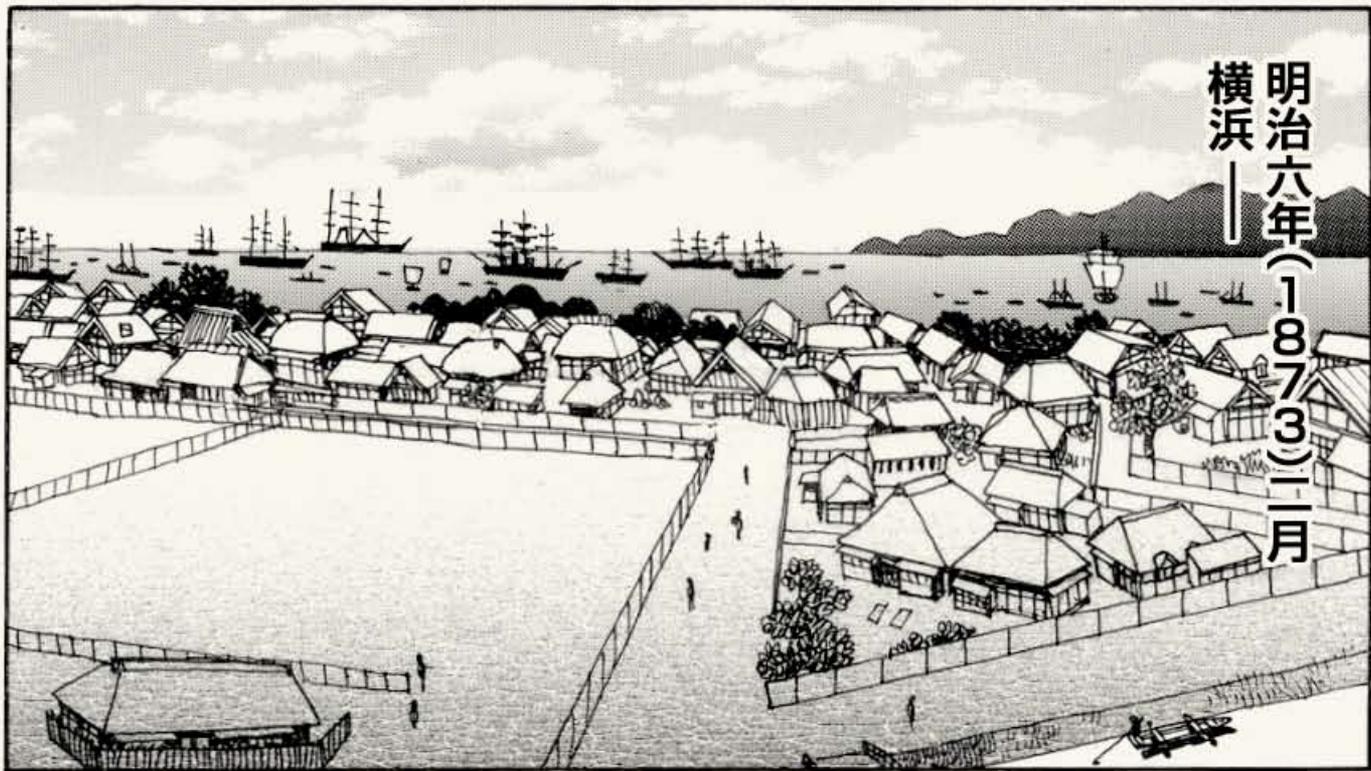
ご維新になつてからの
支配役は八面六臂の
大活躍やな。

今度、
横浜に行きはるので、
明治なつてから
九回目の東上やで。

頭が下がるわ。
わてらも負けん
ように励もうな。



明治六年(1873)二月
横浜



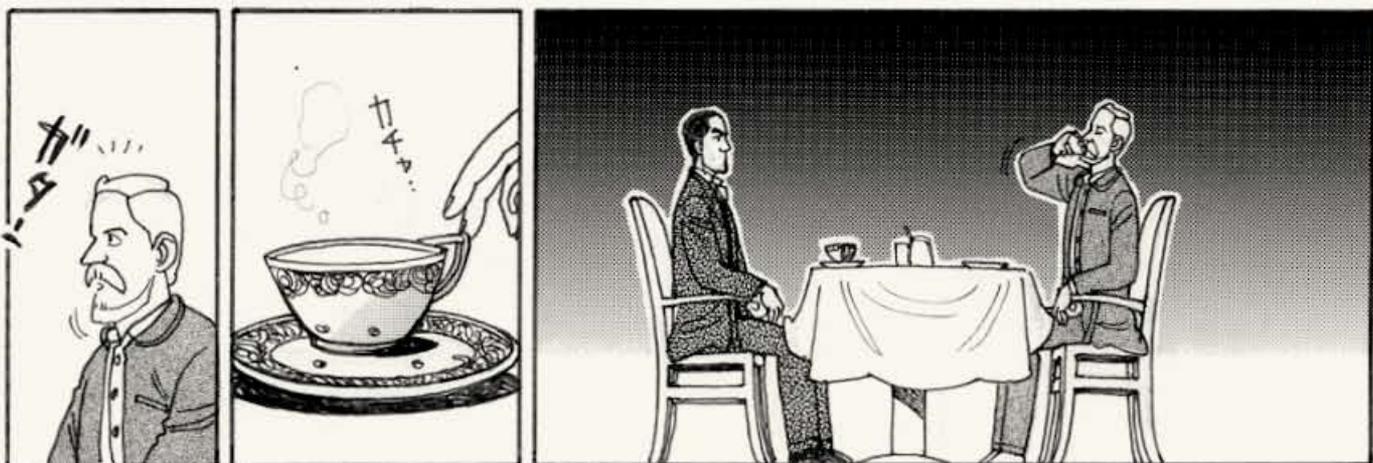
広瀬が伝と言ったのは、
銅輸出を通じて
懸念にしていた
リリエントール商会の社長で、
オリエンタルバンク横浜支店の
代理人も兼務するガイセン。
ハイメルでした。

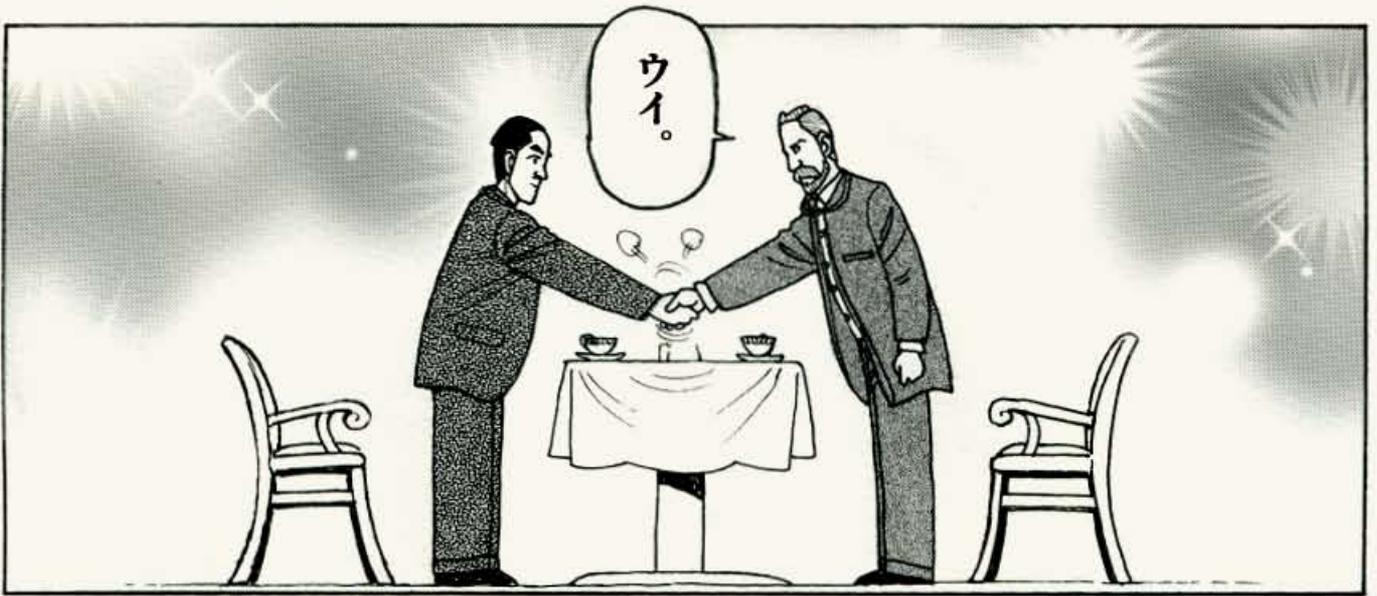


わかりました。
住友さんの銅山の
生産量が増えることは、
私達貿易商にとっても
喜ばしいことです。



ウイ。





明治七年(1874)一月。
フランスから来日した技師..
ルイ・クロード・ブルノー・ラロックは、
列子銅山の近代化プランに
着手し、住友の運命は
それにかかっていたのです。



別子銅山の接収、売却、
倒産の危機を乗り越えた広瀬
次なる一手は、
住友の運命をかけた
近代化プランだったのだが……。